

やさしい 囲碁史

第11回

日蓮上人と弟子の棋譜

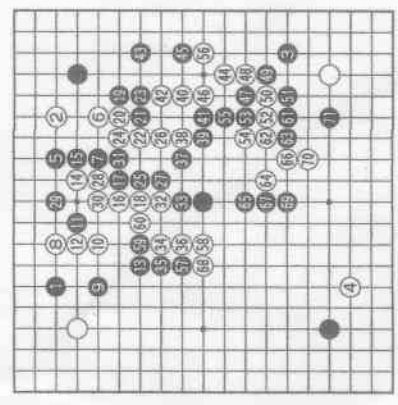
古作 登 (大阪商業大アミューズメント産業研究所主任研究員)

安土桃山時代から江戸時代にかけて活躍した囲碁の初代名人、本因坊算砂 (1559~1623) は法華宗の僧だった。古くから囲碁と仏教の関係は深く、算砂の時代からさかのぼること三百年あまり、日蓮宗・法華宗の宗祖である日蓮 (1222~1282) が弟子の吉祥丸 (1245~1320) と対局した棋譜が伝わっている。

13世紀ごろの碁は中国でも対局開始時に石を配置してから打ち始める「事前置き石制」で、本局も黒が天元を含む星3か所、白が星2か所に石を置いて黒先で打ち始められており二子局に相当、日蓮がうわ手、結果は持 (ジゴ) と記されている。

黒の吉祥丸はのちに日蓮六老僧と呼ばれた日朗。棋譜は開始早々上辺の競り合いから中央、右辺と戦いが広がっていき、布石から中盤まで迫力十分の進行だ。

この対局に関するエピソードが載っているのは江戸時代の『爛柯



1253 (建長5)年、日蓮と吉祥丸の対局とされる棋譜 (1~71)。結果はジゴ。

堂菜話』。著者の林元美 (1778~1861) は八段・準名人にまで昇ったが、文才にも恵まれていた。

日蓮は他の文献にも碁に関する記述があり囲碁をたしなんだことは確かと思われるが、日本で採譜の習慣が始まったのは安土桃山時代と学術的には考えられている。また対局年から推定すると吉祥丸はこの時8歳。本局の棋譜は後世の創作と考えてよいただろう。

やさしい 囲碁史

第12回

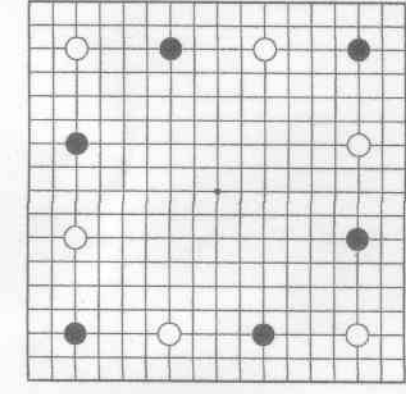
チベットにも碁は伝わった

古作 登 (大阪商業大アミューズメント産業研究所主任研究員)

囲碁は少なくとも紀元前6世紀以前に古代中国で生まれたと考えられているが、東は朝鮮半島諸国や日本に伝わり、正倉院に収められている碁盤「木函紫檀碁局」は有名である。西もシルクロードの分岐点、敦煌に碁の文献が残っており宗教や文化とともに幅広い地域に広まったことがわかる。

同じ西域でも南の高原地域、チベット (現在は中華人民共和国自治区) は北に崑崙山脈、南はヒマラヤ山脈に囲まれインドとも接点があり独自文化を持っていたが、ここでも囲碁が打たれていた。

チベットの碁は「密芒」(ミマン) と呼ばれ、ルールは少し変わっている。盤は17路、これは古代中国4世紀ごろまでと同じで、事前置き石制、白が先番というのも古代のしきたりを受け継いでいるが、置き石の数は白黒六子ずつ。特殊ルールとしてナカアデやウツテ



ガエシのときとすぐに抜き跡に打つことはできず、コウダテのように他に一手打ったあとでなければ着手できない。これは推測だが、仏教の影響もあるかもしれない。

20世紀に入って、チベットに隣接するインド北東部のシッキム王国 (現在はインド・シッキム州) にチベット碁が残っていることが分かり、1959年来日した同国の皇太子が日本の碁士と打った棋譜が存在する。

「チベット碁」の初期配置。黒白六子ずつ置かれ、序盤から戦いになる。朝鮮にも類似の「巡将碁」(19路、八子ずつ) が存在した。